教育委員会だより －学（まなぶ）－

（６月１日号）

交通事故から我が身を守る

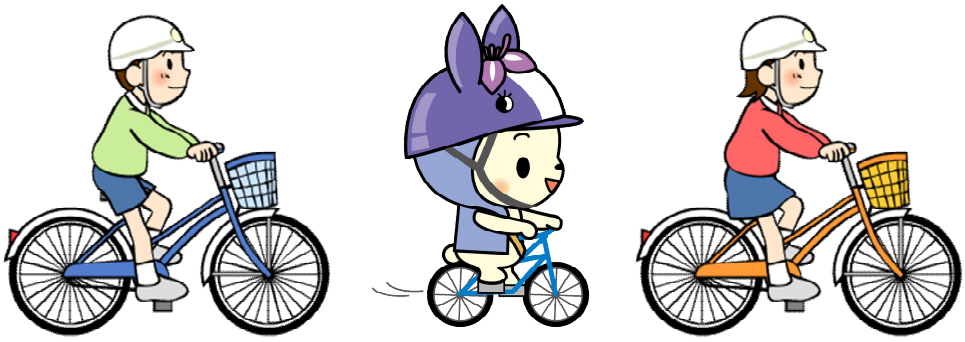
竹内　博之　教育委員

１９５０年代後半、高度経済成長を迎え、日本は急速に自動車が普及してきました。しかし、一方で道路整備や法律が伴わず、事故が多発していました。そして、１９５９年全国の交通事故の死者が一万人を超え、翌年さらに二千人増加し、いわゆる交通戦争と言われていました。多くの子供達も犠牲になり、学校でも大問題となりました。その中で子供を守るための方法や対策を行政・警察等の関係機関が検討してきました。その中で、黄色の帽子が遠くからあるいは暗くなってからでも目立つという事で採用され、今でも全国の多くの小学生が着用しています。

その後、交通事故はかなり減少してきましたが、道路がますます整備され、自動車の性能も格段に良くなりましたが、まだまだ悲惨な事故はなくなりません。

次に、シートベルトの着用が義務付けられ、死亡事故の減少に一役買いました。

最近になって、自転車に乗る場合のヘルメットの着用が努力義務となり、一年余りが過ぎました。転倒した場合など頭部の保護により、外傷の程度がかなり軽減されました。しかし、小中学生の着用率は高いものの、下校後は極端に低くなります。さらに高校生から高齢者に至るまでかなり着用率が減少してしまうのが現状です。

是非我が身を守るためにも、黄色の帽子、シートベルト、ヘルメットの着用を心がけていただきたいと思います。もちろん交通ルールを守ることが第一です。全ての小中学生の保護者や家族の皆様方が我が子のために通学路の安全について確認し危険な箇所や注意しなければならない場所を学校や行政機関に報告していただき、より良く安全な通学路になるように改善の希望・要望を提出してみて、一つずつでも改良されればよいのではないかと思います。

最後に、毎日が明るく楽しく笑いの絶えない家庭であり学校であることを願います。最終的には、我が身は我が身で守るという大原則だけは忘れないようにしていただきたいと思います。